

題材計画（美術科）

子どもたちに身に付けさせたい資質・能力を明確にし、そのための指導と評価が一体化している題材を構想する

1 題材の目標を作成する

- ・学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて作成する。
- ・生徒の実態、前題材までの学習状況等を踏まえて作成する。

2 題材の評価規準を作成する

「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえて作成する

3 「指導と評価の計画」を作成する

- ・1、2を踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。
- ・どのような評価資料（生徒の反応やノート、ワークシート、作品等）を基に、「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。

「知識」
美術の学習の中で生きて働く知識として実感的に理解した実現状況を評価することが求められる。

「技能」
独立した鑑賞の題材では、「技能」については評価規準として位置付けない。

題材名

花の命を感じて

内容のまとまり

第1学年「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」（「A表現」(1)ア(ア), (2)ア(ア), 〔共通事項〕(1)アイ）及び「作品や美術文化などの鑑賞」（「B鑑賞」(1)ア(ア), 〔共通事項〕(1)アイ）

題材の目標

- (1) 「知識及び技能」に関する題材の目標
 - ・形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解する。（〔共通事項〕）
 - ・水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表す。（「A表現」(2)）
- (2) 「思考力、判断力、表現力等」に関する題材の目標
 - ・花を見つめ感じ取った花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。（「A表現」(1)）
 - ・造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。（「B鑑賞」(1)）
- (3) 「学びに向かう力、人間性等」に関する題材の目標
 - ・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく花の美しさや生命感などを基に表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとする。

題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。</p>	<p>発 花を見つめ感じ取った花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。</p>	<p>態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。</p>
<p>技 水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。</p>	<p>鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。</p>	<p>態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

美術科における題材計画のポイント

○題材計画

ねらいとする資質・能力を育成するために必要な画面の大きさや時間数などを十分に考えて題材を検討する。生徒の実態に合った表現方法や材料を選定することが大切である。

○題材名

題材名は、学習のねらいが伝わるように工夫し、生徒が題材を自分のものとして受け止め、主題を考えやすくする配慮が必要である。

○中学校美術科における「内容のまとまり」

- ・「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現「A表現」(1)ア(2), 〔共通事項〕」
- ・「目的や機能などを考えた表現「A表現」(1)イ(2), 〔共通事項〕」
- ・「作品や美術文化などの鑑賞「B鑑賞」, 〔共通事項〕」

○評価の観点及びその趣旨

- 「知識・技能」
- ・対象や事象を捉える造形的な視点について理解している。
 - ・表現方法を創意工夫し、創造的に表している。「思考・判断・表現」
 - ・造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考えるとともに、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりしている。
- 「主体的に学習に取り組む態度」
- ・美術の創造活動の喜びを味わい主体的に表現及び鑑賞の幅広い学習活動に取り組もうとしている。

美術を愛好する心情や、感性は「主体的に学習に取り組む態度」の対象とはならない。生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況については、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で生徒に伝えることが重要である。

美術科における 指導と評価のポイント

◀第一次に鑑賞的な活動が位置付けられているが、ここでのねらいは、発想や構想に関する学習を深めるための活動であるため「鑑賞」は位置付けていない。

◀「知識」

前半の「知識」の評価は、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる。

■例 Cへの手立て

形や色彩などが感情にもたらす効果をより実感的に理解できるよう、身近な体験などと関連付けて考えさせる。

◀「思考・判断・表現」(発想や構想)

第一次の前半では、生徒が主題を生み出すことが重要である。そのため、一人ひとりの生徒が主題を生み出すことができるよう、丁寧に見取り指導をしていくことが大切である。ワークシートなどの記述や思考を深めるための図解などを利用し、生徒が考えを可視化したものを評価資料とすることが考えられる。学習が進み多くの生徒の構想がまとまってきた時点で、まだ構想がまとまらない生徒に重点を置いて見取るとともに、構想がまとまるように指導し、暫定的に評価する。

■例 Cへの手立て

様々な花を用意し、他の花に向き合ったり、身近な体験などと関連付けて、再度主題について考えさせたりする。また全体と部分の関係が分かりやすい作品を用い表現の意図と工夫について考えさせる。

◀「主体的に学習に取り組む態度」

前半には題材に興味や関心がもてず、主題を生み出そうとしていない生徒を把握することに重点を置く。それらの生徒に対しては、意欲が高まるように机間指導等をする。後半から終盤では、生徒が造形的な視点を意識しながら生み出した主題をよりよく表すために心豊かに構想しようとしている意欲や態度を見取る。第一次を通して、よりよい発想や構想を目指して改善を繰り返したり、継続して意欲的に取り組んだりする姿などを総括に用いる評価として記録をしておく。

■例 Cへの手立て

形や色彩などが感情にもたらす効果をより実感的に理解できるよう、身近な体験などと関連付けて考えさせたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりして、再度主題について考えさせる。

指導と評価の計画 (7時間)

●学習のねらい・学習活動	知・技	思	態	評価方法・留意点等
1. 発想や構想 (3時間) <ul style="list-style-type: none"> ●作者の心情や意図に応じた多様な表現について考える。 ・「花」をテーマにした作品を鑑賞し、作者の意図や表し方などについて意見を述べ合いながら、主題と表現の工夫との関係について考えるとともに、形や色彩などが感情にもたらす効果や全体のイメージで捉えることを理解する。 	知 ↓ ↓	思 ↓ ↓	態表 ↓ ↓	<p>知 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しているかどうかを見取り、できていない生徒に対して具体例を示すなどの指導を行う。【ワークシート、発言の内容】</p> <p>態表 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しようしたり、主題と表現の工夫について考えようしたりする意欲や態度を見取り、できていない生徒に対して主題の内容から作品を再度見つめさせるなどの指導を行う。【ワークシート、活動の様子】</p>
●主題を生み出す。 <ul style="list-style-type: none"> ●それぞれの生徒が鉢植えの植物を選び、その花を選んだ理由を考えてみたり、興味をもった花や葉の形や色彩の特徴などから感じたことや考えたことを言葉で書き表したりしながら、主題を生み出す。 	発 ↓			<p>発 花を見つめ感じ取った花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出しているかを見取り、主題が生み出せていない生徒に花から感じ取ったことや考えたことなどを振り返らせるなどの手立てを講じる。【ワークシート】</p> <p>態表 主題を生み出そうとしていない生徒を見取り、花と自己との関係を考えさせるなどの指導を行う。【ワークシート、活動の様子】</p>
●主題を基に構想を練る。 <ul style="list-style-type: none"> ●生徒が生み出した主題を基に、画面全体と花や葉との関係を考え、創造的な構成を工夫し構想を練る。 			発 ↓ ↓	<p>発 構想がまとまらない生徒を中心見取り、できていない生徒に対して、形や色彩などの効果と主題との関係について考えさせたり、主題に基づいた全体のイメージを捉えさせたりするなどして指導を行う。【アイデアスケッチ】</p> <p>態表 構想をしようとしていない生徒を見取り、生徒が選んだ花を再度見つめさせて主題を改めて考えさせたり、形や色彩などが感情にもたらす効果や、全体のイメージなどの造形的な視点に立って考えさせたりするなどの指導を行う。【アイデアスケッチ、活動の様子】</p> <p>発 生徒が、主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っているかどうかを暫定的に評価し、第二次で再度評価を行う。【ワークシート、アイデアスケッチ】</p> <p>態表 楽しく発想や構想の活動に取り組み、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えることを理解しようし、生み出した主題をよりよく表すために心豊かに構想しようとする態度を評価する。【活動の様子】</p>

活動のねらいを確認する
(発想や構想に関する学習を深めるための活動)

主題を生み出すことは、生徒自らが強く表したいことを心の中に思い描くことである。本学習を進めるうえで基盤となるものであり、発想や構想を高めるための重要な部分。

「知識」と関連付け、造形的な視点を豊かにもちながら、主題を生み出せるよう留意する。

生徒が共通につまずいている点を学級全体に指導したり、個々の生徒の課題に対して個別の指導をしたりする。

主体的、対話的な活動などにより、自己の主題を深めたり、アイデアスケッチや言葉で発想や構想をしたことなどを整理したりすることも重要である。その際、〔共通事項〕との関連を図り、造形的な視点を豊かにすることで対象や事象を形や色彩、イメージなどの多様な視点で捉えられるようになることが大切である。

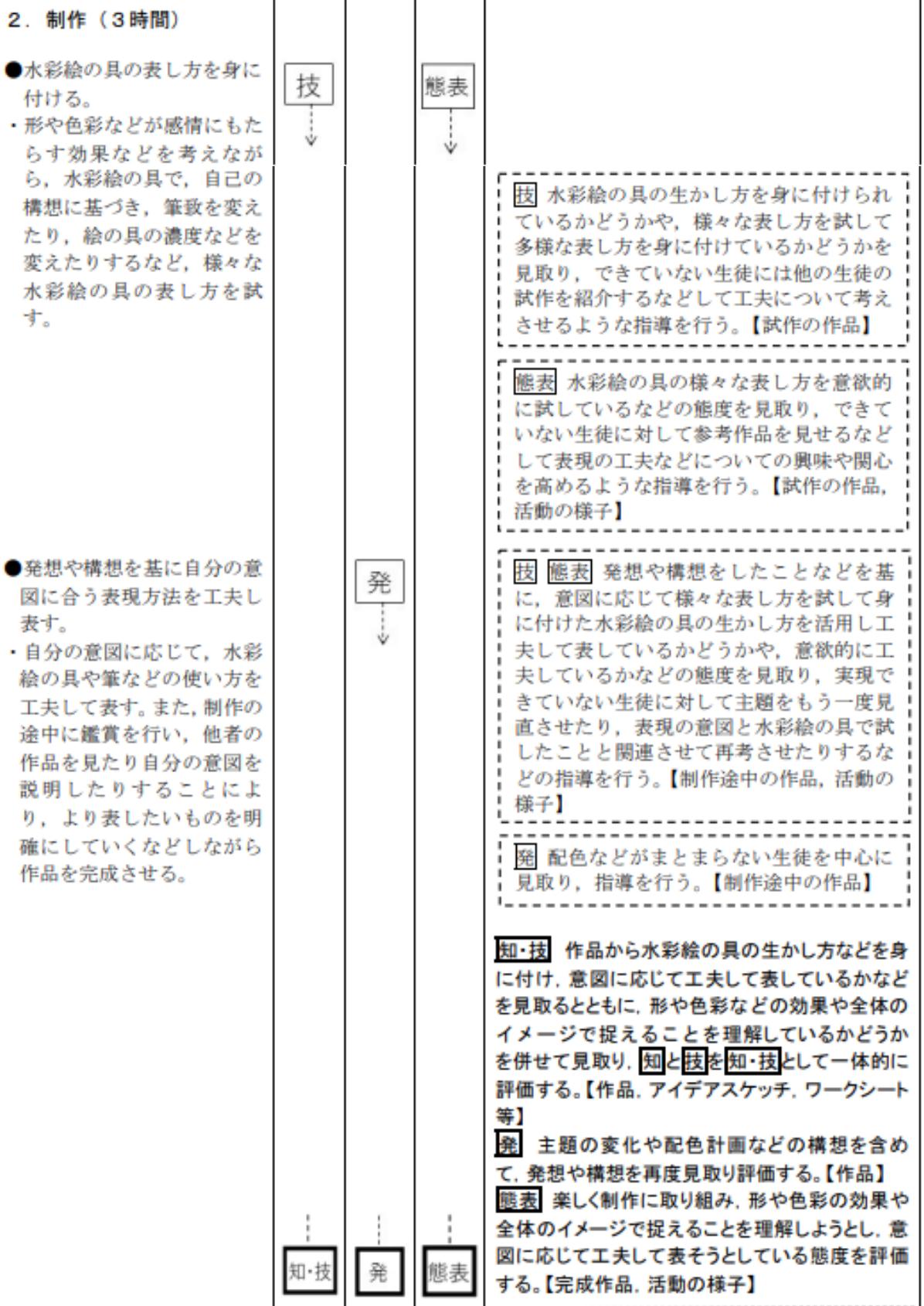
自分の思いや対象を見つめたことから形や色彩の発見を促し、それを表す様々なコツなどを助言することが大切である。

学校や生徒の実態に応じて、美術室など学習活動を行う環境を工夫し、生徒が様々な活動の機会に材料や用具を試したり体験したりして、幅広く材料や用具と出合えるようにすることが必要である。

第二次の1時間目では技能（水彩絵の具の生かし方）が身に付けられていない生徒の指導を中心に行う。

2～3時間目では技能において工夫等ができる生徒へ工夫等ができるよう指導をする。

美術の表現活動においては、「知識及び技能」である（共通事項）が示す造形的な視点の理解や創造的に表す技能と、「思考力、判断力、表現力等」の発想や構想に関する資質・能力は、制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものである。



◀ 「主体的に学習に取り組む態度」

前半は、制作への意欲がもてない生徒を把握し、楽しく意図に応じて創造的に表そうとする態度が高まるよう指揮をする。また、造形的な視点について意識できていない生徒を把握し、関心や意欲が高まるように机間指導等をする。

中盤から終盤では、制作の段階で創造的に表す技能を働かせる学習における「主体的に学習に取り組む態度」は、よりよい表現を目指して試行錯誤する姿や、知識や技能を身に付けようと継続的に意欲を發揮している姿などを評価することが大切なので、前半と後半の状況とを同等と扱い総括に用いる評価として記録をしておくことなどが考えられる。

◀ 「思考・判断・表現」（発想や構想）

第二次では、制作の中で配色などの構想も見取れるようになる。作品の完成が近付いてくる段階では、「十分満足できる」状況（A）と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。授業外においても再度評価し、授業中での評価より高まりがあった場合には修正を加える。

◀ 「技能」

■例 Cへの手立て

具体的な筆づかいや水彩絵の具の生かし方について実演を行いながら説明し、試させたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりする。

完成が近付いてくる第二次の後半は、「十分満足できる」状況（A）と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。作品の完成後、授業時間外に完成作品をワークシート等と見比べながら完成作品からも再度確認することが大切である。

◀ 「知識・技能」

観点別学習状況の評価の総括に用いる評価としては、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、全体のイメージで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは作品にも現れてくると考えられる。そのことから、第二次において作品から、「技能」の水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表しているかを評価する際に、「知識」の形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージで捉えることを理解していることを併せて見取り、「知識」と「技能」を一体的に評価している。

■例 発想や構想をしたことなどを基に、花の柔らかさやあたたかさ、全体のイメージなどを意識しながら花びらの形を描いたり着彩したりする。

発想や構想の学習で主題の創出や構想について学んだことが、鑑賞において作者の心情や意図についての見方や感じ方を広げることになる。

発想や構想と鑑賞の学習の双方に働く中心となる考えを軸にそれぞれの資質・能力を高められるようになることが大切である。

授業中に鑑賞の指導しながら全ての生徒を評価することは困難であることから、授業中はワークシートの記述や発言の内容等から、鑑賞が深まっていない視点等について、個々の生徒や学級全体に助言をすることに重点を置く。

他者と意見を交流するなどの活動では、新たな考え方や価値への気付きにつながるように、生徒一人ひとりが自己と対話してじっくりと考えを深められるような学習活動の設定も必要である。

授業で制作した生徒の作品や鑑賞作品などを、ふだんから校内で鑑賞できるよう、適切な場所に展示し、いつでも作品に親しむことができる環境をつくることが望ましい。また、地域で表現する場をつくることなどにより、学校と社会とをつなげていくことに取り組むことも重要である。美術科は、作品を介して教室内の人間関係だけにとどまらず、教職員や保護者、地域の人々などと連携ができる教科である。

3. 鑑賞（1時間）	知 ↓	鑑 ↓	態鑑 ↓	態鑑 ↓
<ul style="list-style-type: none"> ●生徒作品や美術作品などから、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考え、見方や感じ方を広げる。 ・お互いの完成した作品を鑑賞し、作品から感じたことや考えたことを説明し合う。 ・第一次とは異なる「花」をテーマにした作家の作品を鑑賞し、作品の主題と表現の関係や意図と工夫などについて自分の活動した体験から、新たな見方や感じ方を広げる。 			<p>知 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しているかどうかを見取り、できていない生徒に対して具体例を示すなどの指導を行う。【ワークシート、発言の内容】</p> <p>鑑 作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えることなどができるのかどうかなどと、取り組む態度とを見取り、できていない生徒に対して主題から作品を見つめさせたり、作者の心情について考えさせたりするなどの指導を行う。【発言の内容、ワークシート、活動の様子】</p> <p>態鑑 楽しく作品を鑑賞し、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えることを理解しようとして、造形的なよさや美しさを感じ取ろうとしたり、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えようとしているかどうかを評価する。【活動の様子】</p>	
<授業外：題材が終了後>	知・技 ↓	鑑 ↓	發 ↓	<p>知・技 完成作品やワークシートなどから知・技の評価を再確認し、必要に応じて修正する。【完成作品、アイデアスケッチ、ワークシート】</p> <p>鑑 作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えて見方や感じ方を広げられているかをワークシートで見取り評価する。【ワークシート】</p> <p>發 発想や構想について、主題や構想の工夫などを記述したワークシート等を完成作品と併せて再度見取り必要に応じて修正する。【完成作品、アイデアスケッチ、ワークシート】</p>

※「指導と評価の計画」における記号等の表記は、以下の通りである。

- **□** は、授業の中で評価規準を通して、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる「題材の評価規準」を示す。
- **□** は、題材の観点別学習状況の評価の総括に用いる「題材の評価規準」（授業内での評価を再確認するための評価も含む）を示す。ここで評価が最終的に評定の総括にも用いられることになる。
- **□** は、授業の中で評価規準を通して、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげる留意点等について示している。
- **ゴシック体**は、題材の観点別学習状況の評価の総括に用いる評価についての評価方法や留意点等について示している。
- **【 】**は、評価の方法や生徒の学習の実現状況を見取るための資料を示す。

◀ 「思考・判断・表現」（鑑賞）

生徒の発言の内容に、「十分満足できる」状況(A)に該当するものがある場合には、その評価を記録しておく。観点別学習状況の評価の総括に用いるための評価は、授業終了後にワークシートの記述を基に評価をすることが基本になる。その際、ワークシートの記述からの評価では「おおむね満足できる」状況(B)であるが、授業中の発言の内容は「十分満足できる」状況(A)と判断される場合には、「十分満足できる」状況(A)と評価することなどが考えられる。

■例 Cへの手立て

生徒自身の表現の活動における主題と表現の意図と工夫について振り返らせて、表現で学んだことと関連させながら見方や感じ方を広げられるようにする。

◀ 「主体的に学習に取り組む態度」

第三次の評価は、生徒が他者の作品を鑑賞する様子などを基に、鑑賞への関心や意欲等を把握することに重点を置き、本時において楽しく作品を鑑賞し、造形的な視点を活用しながらよさや美しさを感じ取ろうとしたり、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えようとしているかを見取り、総括に用いるための記録をしておく。

■例 Cへの手立て

自分の作品の意図と関連させ、他者の作品の特徴やイメージなどについて気付かせるようにする。

◀ 「知識・技能」

ある程度、造形的な視点について理解はしているが、創造的に表す技能が十分に身に付いていないことで完成作品からだけでは「知識」が見取れない生徒がいることも考えられるため、授業外において、発想や構想の学習で作成したスケッチや、鑑賞活動でのワークシートなどで再確認することとした。

○「題材の評価規準」に示されている実現状況を見取るために、制作を始めた初期の作品よりも、様々な資質・能力等が働いた跡が見られる完成間近の作品や完成作品から評価をすることが妥当であると考えられる。しかし、最終的に目標を実現するためには、まず主題を生み出し、次にアイデアスケッチ等で知識なども活用しながら構想を練り、最後に材料や用具を生かして作品を制作するといったそれぞれの学習が確実に行われることが大切である。そのため、それぞれの段階で「題材の評価規準」を位置付け、学習のねらいが実現できていない生徒を見取り指導をし、一人ひとりの生徒が段階を追って確実に学習を進められるようにしている。